

いま手渡したいこと

子どもたちに文化を

教師にあこがれと自由を

前回まで「子どもの〈声〉を聴き、その悲しみをつかむ」ということについて書いてきました。これは、「子ども理解」という、教育実践の出発点にあたるしごとにはどのような質が求められるのかということについての、私の考えを述べたものでした。

ところで、このようにしてつかんだ子どもの「悲しみ」に、教師はどう向きあえばよいのでしょうか。今回からはこのことについて考えていきたいと思っています。

悲しみを乗り越える糧になるもの

「私の考えを述べた」と書きましたが、この「考え」は私が一人でひねり出したものではありません。ここで言う「私の考え」は、全障研や教職員組合の教育研究活動などで多くの教育実践と出会い、その担い手である先生たちと話し合ってきた中で、徐々に私の中に形成され

第5回 生きる糧となる文化を手渡す



この かずゆき / 1964年生まれ、奈良教育大学教授。専門は障害児教育学。全国障害者問題研究会副委員長、研究推進委員会委員長。著書に『子どもからはじめる算数一すべての子どもに学ぶ喜びを』（共著）（全障研出版部、2017年）など。

奈良教育大学
越野和之

てきたものことであり、言い換えれば、そうした出会いを通して私が教わってきたこと、ということになります。「いま手渡したいこと」というこの連載のタイトルも、私が多く先輩から学んできたことを、障害のある子どもの発達保障をめざす道行きに新たに足を踏み出した人たちにも手渡したい、そして一緒に考えてもらいたいという思いでつけたものです。

さて、私が多くなことを教わってきた場の一つに、埼玉の麦の会というサークルがあります。1981年に「再建」されて以来、今日まで毎月一回の例会を継続してきた大変息の長い教育実践研究サークルです。遠方なので月々の例会には出られませんが、毎年の夏合宿にはほぼ欠かさず出席させてもらっています。また、麦の会の実践と議論を本にまとめるしごとにも参加させていただきました。2009年には、『学び合い・育ち合う子どもたち―明日の授業をつくる―』（全障研出版部）という本をつくりましたが、この時におこなった座談会で、同会のメンバーの一人である北川祐子さんは次のように話してくださいました。

「きょうだいたちを失って、こわく、さみしく、とてもかなしい世界に取り残されたスイミーに、再び困難に立ち向かう力を与えたのは、海の中のたくさんの『おもしろいもの、すばらしいもの』との出会いだった。私たちの学級の子どもたちもそれと同じなのではないか」ただしこの発言は前掲書には未収録。

さまざまなたらさや悲しさを抱えながら、それでも「幸福に生きたい」という人間的なねがいを胸の奥深くに秘めている子どもたちに、教師がすべきこと、教師こそがしなければならぬことは、悲しみに沈むスイミーに、再び元気を取り戻させたクラゲやイセエビ、見たこ

ともない魚たちに匹敵するような、生きることを励まし、悲しみを乗り越える糧となる、新しい世界との出会いを用意することだということです。

この座談会のタイトルは「それで、あなたは何を教えているんかい？」とされています。このことばは、1981年から2002年まで、共同研究者として麦の会に参加してこられた群馬の田村勝治さんのことばです。初任者として赴任した児童施設内の分教場の子どもたちの大変な状況を報告した北川さんに、田村さんはまず「子どもの悲しみに共感できる教師になりなさい」と助言し、次いで「それで、あなたは何を教えているんかい？」とたずねられたそうです。子どもの悲しみに寄り添うことは大切です。けれどもそれだけでは教師のしごととは終わりません。子どもの抱える悲しみを深く理解しつつ、同時にそれを乗り越えるための糧になるような、値打ちのある文化を手渡すこと、それこそが教師のしごとなのだ、という思想が先の田村さんのことばには込められているのです。

顕微鏡、買うべえじゃねえか

私は90年代の末に麦の会に出会い、そこで田村さんとも出会いました。その後、品川文雄さんの導きで二度に渡って群馬・伊勢崎市の田村さんのご自宅に伺い、お話を聞かせていただきました。田村さんが逝去されたのは2002年の秋、私はその直前に、田村さんから最後のバトンを受け取ったのだと思っています。

田村さんが障害児教育に関わり始めたのは1960年代、群馬の小学校の校長だった40代半ばのことです。文部省（当時）の施策として特殊学級の増設が図られるな